Alice Thornton の自伝的語り

病と出産による自己表現

浅川さおり

1. はじめに

本発表は、Alice Thornton(1626-1707)が残した自伝をもとに、病や出産をめぐる彼女の語りから初期近代の女性の自己表現のあり方を考察するものである。Aliceはイングランドのジェントリー階級に生まれ、アイルランド総督を父に持ち、裕福な幼少期を送ったが、父の死去と政治的混乱により生じた一家の財政的困難を解決するために、25歳の時 William Thornton (1624-68)と結婚した。Aliceは17年間の結婚生活において9人の子を産み、そのうち6人が夭折している。彼女が残した4冊の自伝的手稿は、近年オンラインで閲覧可能となっているが(“Alice Thornton’s Books”)そこには妊娠、出産や病の経験、医師や家族との関わりが詳細に記されている。これまでの研究では、Aliceの自伝は出産を女性自身が記録した貴重な歴史的資料として注目されてきた。しかしながら本発表では、出産経験を語ることを通じて自伝において Alice がどのような自己像を構築しようとしたのかを明らかにする。

17世紀は産婆主導の出産から外科医の介入が進む過渡期にあり、Aliceは出産時には産婆を呼び、妊娠中と産後には医師の治療に頼っていた。その記録からは、医療における医師と患者の関係や家族間の力関係、彼女の身体感覚と意思決定の様子が窺える。本発表では、相反するかに思われる Alice の二つの側面—病の苦しみに耐える受動的な側面と、治療方針を決定する能動的な側面—に注目し、彼女が病の語りによっていかに自己を表出しようとしたのかを考察する。

2. 脆弱で受動的な「私」： “I was deeply gon in a Consumption”

ここでは、Aliceが自らの妊娠、出産と病の体験を語る中で、自身をいかに脆弱で受動的な存在として表現しているかを考察する。自伝では、単に病の状態の描写に留まらず、医師や家族との関係性の中で病に耐える彼女の姿が記録されている。

初期近代の医学では、女性は男性よりも冷たく湿性の存在とされ、健康維持のためには過剰な血液の排泄(例えば月経や悪露)が不可欠とされた(Churchill 95)。こうした医学的理解は、女性の身体を「弱く、病気にかかりやすい」(Sharp 190-91)ものとみなし、医師の治療を正当化する根拠となった。また、女性の治療は家父長的な家族構造によって大きく制限されていた(Smith 230)。このような背景の元で Alice は、妊娠中の重篤な症状と医師 Robert Wittie の治療による回復の経過を語り、病に耐えつつ医師と家族に自身を委ねる自己を表現する。例えば、産後20週間以上の出血と失神が続いたために、医師の助言と家族の判断によって鉱泉に赴いたことについては、以下のように語られている。

And it was the opinion of Dr wittie that I was deeply gon in a Consumption, and if that contineued longer, I should be barren. All which beeing considered by my deare husband & mother. they were resolved from the Drs oppinion that I should goe to Scarbrough spaw for the cure of the said distemper, & accordingly, I went with Mr Thornton staing about a month there, in which time I did by the blessing of God recover my strength. (Book I 153)

このように Alice は自らの身体について詳細に記す一方、その管理と回復を医師や家族に委ね、その判断に従順に従っていることを読者に印象付ける。さらに、このような医師と患者の二者関係だけでなく、家族との関係にも影響を受けて療養していたことを次のように語る。

Loe in this most sad & heavy condittion was I in; not haveing any soule living that I could open my greifes & thoughts to nor receave any comfort, for my dejected heavy spiritt; for that time Mr Thornton; was himselfe in a sad condittion, & very malencoly full of trouble of spiritt, nor would I acquaint him least I should be an agravation of his trouble. And Alass, what could I say in this exigent(Book I 187)

Aliceは、病の夫を気遣って沈黙を選び、病苦に耐えている。“I was deeply gon in a Consumption”と綴ることで、彼女は自身の身体的衰弱だけでなく内面の脆弱さをも示唆している。その一方で、「従順さ」を強調し、病という試練に耐えるばかりの自身の姿を描くことを通じ、Aliceは救済に値する自己像を構築しようとする。このような耐える自己は、Anne Halkettが信仰を通じて苦難を受け入れる姿と重なる。これら女性の語りは、表面的には受動的に見えるものの、そこには苦しみに耐え抜くという能動的な姿勢が表れており、Mary Beth Roseの言うところの「忍耐のヒロイズム」(“the heroics of endurance”)(xv)がみられるのである。つまり、病を記録することは女性にとって自己の存在、信仰、徳を表現する行為であり、受動的で脆弱な身体の表象を通じ、Aliceは自伝において毅然とした自己を示そうとしたと言える。

3. 決断する主体的な「私」： “I must bleed”

Alice は出産に際し、常に受け身であったわけではない。治療の選択において時として主体的に決断する自身の姿を描いている。彼女は身体の極限状態において自らの身体感覚と信念に基づいて行動している。例えば第 1 子妊娠中に熱感と鼻血という身体の異常を感じた際、Alice はそれを体液理論に照らして解釈し、瀉血の必要性を訴えた。しかし、妊婦への瀉血が一般的でなかったために夫や母に反対され、彼女はその意向を受け入れるも、彼女の体調は悪化の一途を辿った。「強烈で腐敗性の熱」(Book 2 140)に苦しむ彼女は瀉血の希望を 2 人の医師 Wittie と Richard Mahum に伝えるが、彼らは瀉血の是非を巡り対立した。2 人の医師を前に、“... I soone desided that dispute & tould them if they would save my life I must bleed.” (Book 1 128)と Alice はきっぱりと瀉血する意思を示した。彼女は自身の判断で治療方針を決定し、医師と家族を動かしたのである。瀉血の後生まれた第 1 子は亡くなるが、Alice は自身の判断の正当性を信じた。さらに第 2 子の妊娠中には、夫と母の同意を得て Mahum 医師に瀉血を行わせ、胎児が再び元気を取り戻したことを記録する。

Notwithstanding great danger of falling into a miscarriage as with my first that died but for thy gracious delevry of me and it by the meanes of beeing lett blood which cured the feavr and prevented her death(Book 2 146)

このように、出産と産前産後の病に苦しむ極限状態の中で、Alice は身体の異変を認識し、自身の願いと周囲の意見の間で葛藤しながらも、最終的には自らの信念に基づいて決断した。Alice の出産の記録には、彼女が苦難の中で主体的に判断を下す自己像を形作っていく過程が鮮やかに描かれている。

4. おわりに

本発表では、Alice が妊娠・出産・病の経験を語ることを通して、いかに自己を描出したかを考察した。彼女は、医師や家族に判断を委ねる脆弱で受動的な存在として自身を語り、初期近代の理想的な女性像に沿う従順さと忍耐を自己の強さや美德として表現している。一方で、「瀉血しなければなりません」という発言に見られるように、彼女は自らの経験と信念に基づき、治療を主体的に選択する自身の姿を描く。Alice は家父長制社会の理想的な女性患者として自らを描きつつ、その一方で能動的な自己像を巧みに構築したのである。

[Works Cited]

- Beattie, Cordelia, et al., editors. “Book of Remembrances.” *Alice Thornton's Books*, <https://thornton.kdl.kcl.ac.uk/>.
———. “Book 1.” *Alice Thornton's Books*, <https://thornton.kdl.kcl.ac.uk/>.
———. “Book 2.” *Alice Thornton's Books*, <https://thornton.kdl.kcl.ac.uk/>.
———. “Book 3.” *Alice Thornton's Books*, <https://thornton.kdl.kcl.ac.uk/>.
Churchill, Wendy D. *Female Patients in Early Modern Britain: Gender, Diagnosis, and Treatment*. Routledge, 2012.
Moody, Ellen, editor. “Anne enables Alexander and Anna Mackenzie Lindsay to escape and tries to save their books from destruction; another period of psychosomatic illness.” *The Autobiography of Anne Murray, Lady Halkett*, note 6, <http://www.jimandellen.org/halkett/BalcarresEscapeIII.html>.
———. “Notes to ‘A hole in the manuscript big enough to put your finger through:’ the misframing of Anne Murray Halkett's autobiography.” *Lady Halkett*, note 49, <http://www.jimandellen.org/halkett/ahole.notes.html>.
Rose, Mary Beth. *Gender and Heroism in Early Modern English Literature*. U of Chicago P, 2001.
Sharp, Jane. *The midwives book, or, The whole art of midwifry discovered*. Edited by Elaine Hobby, Oxford UP, 1999.
Smith, Lisa Wynne. “Women's Health Care in England and France (1660-1775).” 2001. U of Essex, PhD dissertation.